AP/FD NEWS LETTER
横浜国立大学 教育推進機構
2026.11 Vol.26

CONTENTS

P1 巻頭言 教育開発・学修支援部門の現在の取組みについて
教育推進機構 教育開発・学修支援部門長 杉山 久仁子
P2 学業における生成AIの利用状況と意識の変化
―2024年度・2026年度 学生アンケートの比較から―
教育推進機構 安野 舞子
P6 大学教育の質保証 ⑩ 初年次必修科目「YNUリテラシー」
第1、2回：学生の受け止め
教育推進機構 市村 光之
P8 機構ニュース



教育開発・学修支援部門の現在の取組みについて

教育推進機構 教育開発・学修支援部門長 杉山 久仁子

今年度から、教育開発・学修支援部門長に就任しました。これまでは、大学の入学者受け入れに関連する高大接続部門、大学における教職課程の質保証に関わる教職課程部門に関わってきました。今回は、学部教育及び大学院教育の質保証について関わらせていただきます。

この部門の前身は大学教育総合センターFD推進部です。2007年度にニュースレターの創刊号が発行され、20年が経ちます。故飯田嘉宏先生が当時学長としてニュースレターへの期待を寄せられており、最後に次のように書かれています。「学生一人ひとりのその後の社会生活での自己実現を支援する教育を行うことに教員の存在意義があるわけで、何コマか授業を担当することでは断じてありません。大学教育といえども、教育にはこうした人間的側面が重要なわけで、この意識があって初めて、知力と労力を伴う対話型教育が可能になるでしょう。」

現在本部門では、教育開発、学修支援、ファカルティ・ディベロップメント（FD）を柱に、よりよい教育を実現するための活動を行っています。教育開発としては、今年度は次年度のシラバスの記載内容をより充実したものとするために、シラバスを点検するシステムなどについて確認すると共に、毎年12月に先生方に依頼するシラバス作成の内容について再検討を行っているところです。

また、今年度は必修科目「YNUリテラシー」を新規開講し春学期に実施しました。この授業は初年次教育で、目的は、「大学を単なる知識の習得の場として捉えるのではなく、自分の将来や社会とのつながりを意識しながら、主体的に学ぶ姿勢を育てていくこと。」としています。受講対象者が1800名弱と多く、初めての実施のため、新入生オリエンテーションにおいて丁寧に学生に趣旨や履修方法に関する説明を行いました。この授業の教材の準備から実施に至るまでご尽力いただいた先生方に感謝いたします。結果を踏まえ、教材内容の見直しや各学部との連携の在り方を検討する必要があるため、部会においてＷＧを設置します。今年度の実施結果の一部をこの後の頁で客員教授の市村先生に報告していただいておりますので、是非ご覧ください。

学修支援としては、2012年度から実施している卒業時アンケート、今年度春学期に2年ぶりに実施した生成ＡＩの利用状況と意識に関するアンケート（2～4年生対象）の結果を部会で共有し、課題について整理しています。後者の結果については、この後の頁で安野先生からご報告いただいていますので、ご覧ください。

FDについては、学期末に実施していた授業アンケートに加え、昨年度秋学期から中間期授業アンケートを実施しています。ご協力いただきました先生方に感謝いたします。これらの結果を分析し、授業アンケートの在り方について部会内のWGで議論をします。回答率の低さの改善も必要ですが、授業アンケートの目的や位置づけ（「教員の授業改善」から「学生の学修記録」とする等）などの検討を継続することとしています。また、横浜市内4大学連携によるFD・SDに関する情報交換や課題共有を2024年度から継続して実施しています。

大学における教育を充実するためには、学生が大学で学ぶ意義を正しく理解するとともに、先生方には、担当授業科目等の中で、育てたい学生像をイメージして、その実現に向けて取り組んでいただけるようになればと思っております。本部門では学生の学修状況に関する様々なデータを収集しておりますのでご活用いただき、またご意見などをお寄せいただければ幸いです。

学業における生成AIの利用状況と意識の変化

―2024年度・2026年度 学生アンケートの比較から―

教育推進機構　教育開発・学修支援部門　安野　舞子

はじめに

教育推進機構では、本学学生が学業の場面で生成AIをどの程度、どのように利用しているのか、また生成AIに対してどのような意識を持っているのかを把握するため、2024年度春学期の履修登録時に、学生プロファイルの入力を利用したアンケートを実施し、その結果を本ニュースレターVol.22でご報告しました。このアンケートは、2023年11月に実施した「生成AIの活用等に関する教員アンケート」（Vol.21で報告）において、「そもそも学生が利用しているかどうかすらわからない」といった声が寄せられたことを受け、学生の実態を把握する目的で実施したものです。その時点では、学業で生成AIを「週に数回程度使っている」学部生は12.6%にとどまり、最も多かったのは「過去に１～２度ほど使ったことがある」層（29.6%）でした。

それから２年が経ち、生成AIは急速に高性能化・普及し、学生の学業での利用のあり方も大きく変化していることが予想されました。そこで、2026年度春学期にも同じ設問でアンケートを実施するとともに、新たに自由記述の設問を設け、学生が具体的にどのような場面で生成AIを活用しているかも尋ねました。

本稿では、２回のアンケートの結果（学部２～４年生）を比較し、この２年間で何が変わったのかをご報告いたします。

アンケートの実施概要

実施時期：2024年度・2026年度の春学期履修登録期間
実施方法：オンライン（学務情報システム）
対象者：学部２～４年生
有効回答数：2024年度　4,170名
　　2026年度　4,238名

なお、２回の調査は対象学生が入れ替わっているため、同一個人の変化を追ったものではなく、２時点の学生集団を比較したものである点にご留意ください。

アンケートの結果

アンケートでは、前回と同じ以下の３つの設問に加え、2026年度は４つ目の設問（自由記述）を新設しました（１）～３）の選択肢は前回の報告をご参照ください）。

１）学業の場面で生成AIを利用していますか。（利用頻度）
２）学業のどのような場面で、生成AIを利用していますか。（複数選択）
３）生成AIの利用に関するあなたの考えについて、あてはまるものすべてを選んでください。（複数選択）
４）学業または学業以外の場面で、あなたが生成AIをどのように活用しているか、具体的な事例や工夫があれば自由に教えてください。（自由記述・2026年度のみ）

１．学業での生成AIの利用頻度

最も大きな変化は、「週に数回程度使っている」学生が12.6%から57.4%へと、約4.5倍に増えたことです。「月に数回程度」（23.5%→29.4%）と合わせると、月に数回以上利用している学生は36.1%から86.8%に達しました。一方、前回最も多かった「過去に１～２度ほど使ったことがある」は29.6%から8.5%へ、「使ったことはなく、今後も使わない」は13.6%から2.1%へと大きく減少しています。多くの学生が「お試し」の段階を経て、日常的な利用へと移行したことがうかがえます（図１）。

また、2024年度に「使ったことはないが、今後使ってみたい」と回答した学生は20.7%いましたが、2026年度は2.6%にまで減っています。当時「使ってみたい」と考えていた学生の多くが、実際に利用を始めたと考えられます。

前回の報告では、全国調査（仙台大学、2024年３月）との比較から、本学学生の利用頻度は全国と同程度であると述べましたが、この２年間の変化の大きさからす

ると、学生にとって生成AIは、もはや「使うかどうか」ではなく「どう使うか」が問われる段階に入ったと言えます。

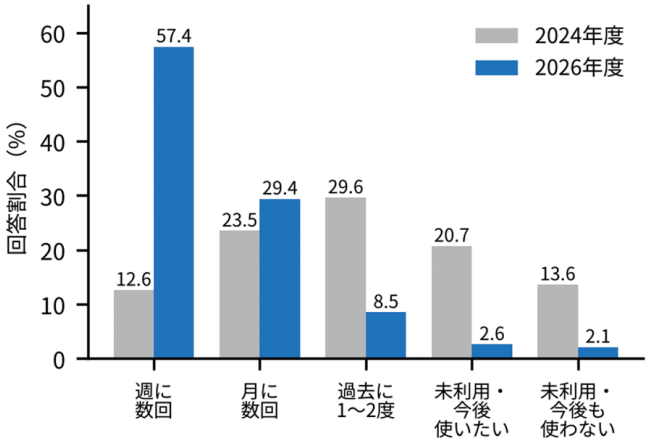


図１　生成AIの利用頻度：全体

学年別に見ると、月に数回以上利用している割合は、2024年度は34.3～39.8%でしたが、2026年度はいずれの学年も85%を超え（２年生85.3%、３年生89.0%、４年生86.1%）、学年による差はほぼなくなりました。2024年度に最も利用率が高かったのは３年生（39.8%）で、2026年度も僅差ながら３年生が最も高いという結果でしたが、学年を問わず、生成AIの活用は前提のスキルになりつつあると言えます。

学部別に見ると、すべての学部で利用率が２倍以上に伸びました。経営学部（89.3%）と理工学部（90.4%）は約９割に達し、ほぼ全員が日常的に利用している状態に近づいています。伸び幅を見ると、教育学部（＋60.7ポイント）に次いで、都市科学部（＋53.3ポイント）、経済学部・理工学部（いずれも＋48.6ポイント）、経営学部（＋47.0ポイント）の順となっており、2024年度に利用率が低かった学部ほど大きく伸び、学部間の差は縮小傾向にあります。

一方、教育学部は伸び幅こそ最大（15.5%→76.2%）でしたが、到達水準は５学部の中で最も低く、経営・理工学部との差は約14ポイントあります。教育学部は前回、「使ったことはない」の回答が６割を超え、「今後も使わない」も27.3%と突出して高かった学部であり、実技・実習中心のカリキュラムや、教員養成という立場からの慎重さが背景にあるのかも知れません（図２）。

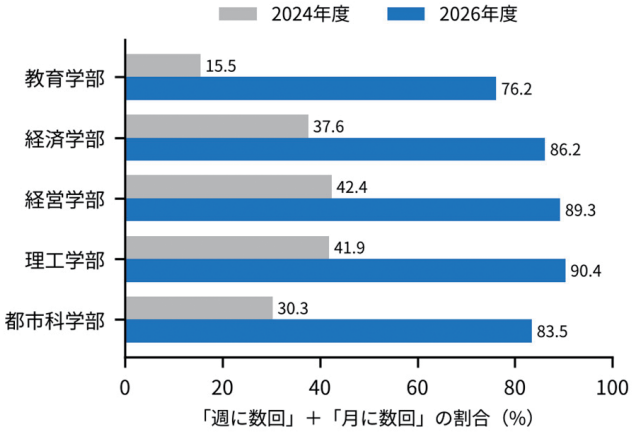


図２　月に数回以上利用している割合：学部別

２．学業での生成AIの利用場面

2024年度は「レポート等の課題に取り組む時の参考として」（32.2%）が突出しており、生成AIは主に調べもの（検索エンジンの代わり）として使われていたと考えられます。2026年度もこの項目が最多（57.6%）ですが、次いで「あるテーマについて議論したり考える時の参考として」（23.5%→40.2%）、「自分が書いたレポートや論文の文章校正のため」（10.3%→32.1%）、「授業で取り上げられた専門用語や概念などの意味を確認するため」（10.1%→27.8%）が大きく伸びました。情報収集にとどまらず、考える・書く・見直すという学修の各工程に、生成AIが組み込まれつつあることが分かります（図３）。

特に「文章校正」が約３倍に伸びたことは、自分で書いた文章をAIで見直すという使い方が広がっていることを示しています。前回の報告では、生成AIの出力をそのまま課題に貼り付けるような使い方への注意を述べましたが、こうした使い方は、それとは異なり、学修の質を高める方向での活用と捉えることもできます。

特に注目したいのは、「授業で宿題や課題として意図的に生成AIを使うよう指示が出たとき」が13.3%から27.9%へと倍増している点です。学生の自発的な利用だけでなく、教員の皆さまが授業や課題の設計に生成AIの活用を組み込み始めていることの表れと言えます。

一方、外国語関連では、「外国語を日本語に翻訳して読むため」（10.1%→17.4%）、「自分が書いた外国語の文章を添削するため」（6.0%→12.7%）と、いずれも伸びてはいるものの、２割には届いていません。前回の報告でも、学部生はGoogle翻訳やDeepLなどのAI翻訳ツールを日常的に使っており、それで事足りているのではないかと述べましたが、この傾向は現在も続いて

いると考えられます。また、プログラミング関連（コード作成9.6%→12.9%、コード添削10.0%→14.9%）の伸びも相対的に緩やかで、理工学部に利用が偏っている傾向がうかがえます。

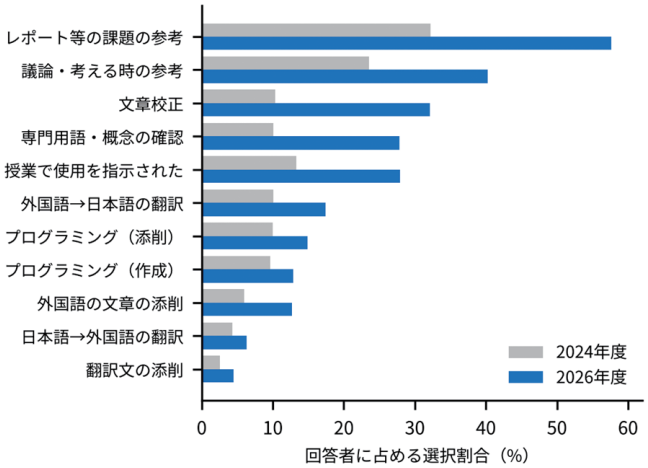


図３　生成AIの利用場面：全体

3．生成AIの学業利用に対する意識

メリットに関する項目は軒並み上昇しました。特に「自分では思いつかない観点から情報が得られ視野が広がる」は43.0%から57.9%へと伸びて最も多く選ばれ、前回は15.6%と低かった「レポートやプレゼン資料などを論理的に構成できて便利」も26.2%に増えています。「素早く答えが得られるので効率的」（40.9%→45.7%）も引き続き高く評価されており、「AIは就職後必要なツールなので将来的には使いこなせるようになりたい」（18.2%→22.2%）、「外国語学習の補助ツールとして便利」（16.7%→21.0%）も、それぞれ４ポイント程度増えています。生成AIが、「素早く答えが得られる」効率化の道具としてだけでなく、思考の幅を広げる相手としても捉えられ始めていることがうかがえます（図４）。

同時に、不安を示す項目も増えています。「AIに頼りすぎると思考力が低下しそうで不安」は31.6%から48.4%へと、メリットの項目に匹敵する伸びを示し、「個人情報が漏れるのが不安」も6.4%から19.4%へと約３倍に増えました。前回の報告では、教員アンケートで「学生の思考力や創造性が損なわれる可能性がある」と不安視していた教員が48.7%だったのに対し、学生自身は教員ほどの不安を抱いていないようだと述べましたが、2年を経て、学生の不安も教員と同程度の水準になりました。利用が広がるほど、学生自身がリスクを実感するようになっていると考えられます。

また、前回リスクとして最も多く挙げられた「AIの回答の信ぴょう性が不安」も41.0%から47.6%に増えており、メリット（視野の広がり57.9%）とリスク（思考力低下48.4%、信ぴょう性47.6%）が、ともに約半数の学生に意識されています。これは、生成AIを手放しで受け入れるのでも拒むのでもなく、その利点と危うさの両方を理解しながら使う、いわば「利用の成熟」の兆しと見ることもできます。その一方で、不安を感じながらも使わざるを得ない状況にある学生がいることも考えられ、大学として利用のためのガイドラインやリテラシー教育を整える必要性が高まっていると言えます。

一方、「AIが信頼できるツールになったら使いたい」（13.3%→5.4%）や「Google等の検索エンジンで事足りる」（5.6%→1.6%）は減少しており、様子見や懐疑的な姿勢の学生は少数になりました。ただし、「AIを学業でうまく利用する方法を早く学びたい」は18.0%から16.5%へとわずかに減っており、利用が急速に広がる一方で、適切な使い方を学ぶことへの意識は高まっていない点には留意が必要です。

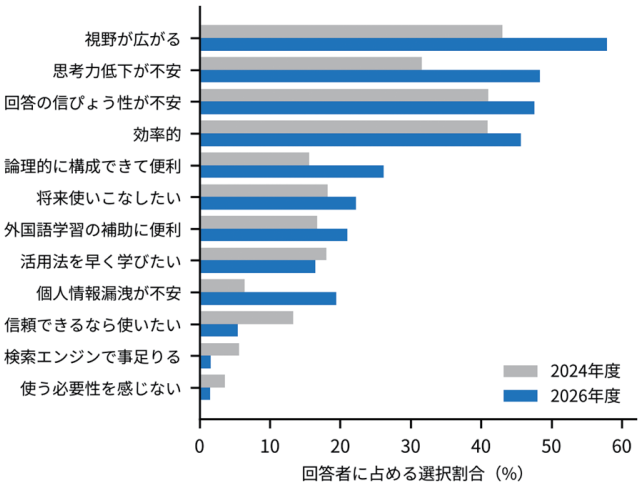


図4　生成AIに対する意識：全体

4．自由記述にみる活用の実態

2026年度に新設した自由記述の設問には、893件（回答者の21.1%）の具体的な回答が寄せられました。1件の回答に複数の用途が書かれている場合が多いため、回答を項目ごとに分けてキーワードで分類し、学業での活用と学業以外での活用を区別して集計しました（図５）。なお、個別性が高く共通のカテゴリにまとめられない回答（249件）は集計から除いています。

学業では、「レポート・課題・論文作成」（7.2%）、「文章校正・添削」（4.8%）、「壁打ち・アイデア相談」（4.1%）などが多く挙げられました。「まず思いつくまま書き、後からAIで校正する」といった執筆の工夫や、ゼミや

研究のテーマ選定・考察の際に、対話相手として思考を整理するといった使い方も見られます。このほか、「プログラミング」（4.3%）、「専門用語・授業内容の理解」（3.5%）、「要約・文献調査」（3.1%）、「翻訳・語学学習」（3.0%）も一定数挙げられており、選択式の設問で見られた学修の各工程への広がりが、自由記述からも裏付けられます。学生生活では「就職活動（エントリーシートの添削や面接対策）」（7.8%）が最も多く、サークルやアルバイト先へのメールの敬語表現の確認などにも使われています。

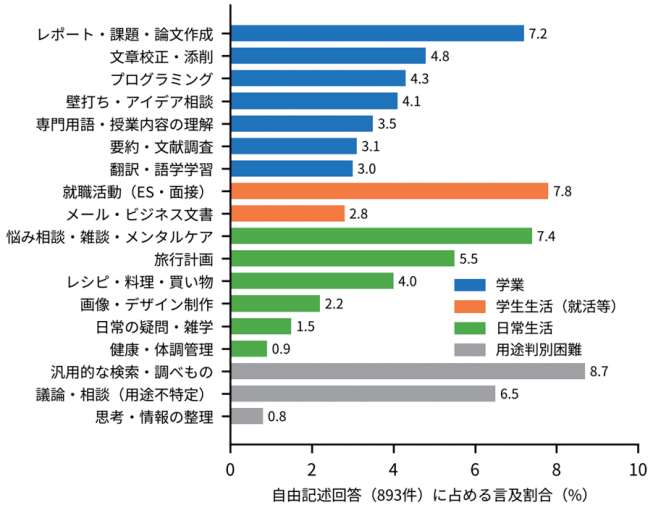


図５ 自由記述にみる生成AIの活用場面

学業以外では、「悩み相談・雑談・メンタルケア」（7.4%）が就職活動と並ぶ規模で言及されており、「旅行計画」（5.5%）や「レシピ・料理・買い物」（4.0%）など、日常生活のさまざまな場面にも利用が広がっています。生成AIは学生にとって、学習支援の道具であると同時に、身近な相談相手にもなりつつあり、学生支援の観点からも留意すべき傾向と言えます。悩みや気持ちの整理に生成AIを使うことには、気軽に相談できるという利点がある一方で、深刻な悩みを抱える学生が、必要な支援につながりにくくなるおそれもあります。学生相談などの窓口の周知とあわせて、注意を払っていく必要があると考えます。

なお、「調べ物をするときに使っている」（8.7%）、「相談に乗ってもらっている」（6.5%）のように、学業目的か日常生活目的かを文面だけでは判別できない記述も多く見られました。学生にとって生成AIは、学業と日常生活の境目なく使われる、身近な道具になっていることがうかがえます。

まとめ

２回のアンケートの比較から、わずか２年の間に、学業での生成AIの利用は「一部の学生が試しに使う道具」から「大多数の学生が日常的に使う学習インフラ」へと大きく転換したことが明らかになりました。月に数回以上利用している学生は約９割に達し、その用途も、調べものから、考える・書く・見直すという学修プロセス全体へと広がっています。前回の報告では、「素早く答えが得られるので効率的」という意識の高さから、生成AIの出力のコピー＆ペーストが安易に行われていないか注意が必要であると述べましたが、利用がこれだけ日常化した今、課題やレポートの評価のあり方を含め、その重要性はさらに増していると考えます。

また、利用の拡大とともに「思考力の低下」や「個人情報の漏洩」に対する学生の不安も強まっており、利用の広がりは手放しの肯定を意味するものではありません。こうした結果を踏まえ、今後は次の３点が重要と考えます。

第一に、利用を前提とした上で、何にどう使うべきか（一次情報による検証、個人情報を入力しないこと、引用や著作権の扱いなど）を明文化したガイドラインの整備と、令和８年度から全学必修化された「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」（YOKOHAMA MDAプログラム）のさらなる発展です。「AIを学業でうまく利用する方法を早く学びたい」と考える学生が増えていないことからも、適切な利用のための知識と能力を養う機会を、正課の中で確実に提供していくことが求められます。

第二に、授業設計への組み込みの拡大です。「授業で意図的に使用を指示された」学生が倍増しているように、教員主導での活用は着実に広がっています。2024年３月に発行した「生成AIの活用に関するグッドプラクティス集」に続き、生成AIを活用した授業の実践事例を、FD等を通じて蓄積・共有していく仕組みが有効と考えます。

第三に、継続的なモニタリングです。わずか２年でこれほど大きな変化が生じたことを踏まえ、今後も定点観測を続け、自由記述の分析を深めながら、学部別・学年別の活用の違いなども把握していきたいと考えています。

本報告が、教員の皆さまにとって、授業における生成AIの扱いを考える一助となれば幸いです。

大学教育の質保証 ⑩

初年次必修科目「YNUリテラシー」第１、２回：学生の受け止め

教育推進機構 学生IR統括部門　市村　光之

今年度より、教育推進機構提供の初年次必修科目として「YNUリテラシー」（オンデマンド方式、春学期全8回）が開講しました。新入生向けのリテラシー教育には、全学共通で把握していただきたい汎用的な内容と、各学部の専門性や進路に応じた個別の内容があります。本科目は全学共通部分をカバーする内容です。

同科目は「大学を単なる知識の習得の場として捉えるのではなく、自分の将来や社会とのつながりを意識しながら、主体的に学ぶ姿勢」の醸成と、「大学での学びを自分のライフキャリアの出発点とし、より充実した学生生活を送るための基盤」を築くことを目指して授業設計しています（シラバスより）。今回は、その第１回、第２回授業を学生たちがどのように受け止めたかについて報告します。

リテラシー科目第1、２回の位置付け

第１回授業は「ライフ・キャリアの視点で大学生活を考える」がテーマです。今や想定外が「想定内」の時代になり自律的なキャリア形成が求められています。その現状を踏まえ、ウェルビーイングの視点で学業および人生を考えることや主体性の重要性について、学生IRや卒業生・就職先調査結果を盛り込みつつ、本学学生の資質や意識に合わせてできる限りリアルな内容にしています。

第２回授業のテーマは、「大学での学びを構想する」です。大学では能動的な学びの姿勢が求められますが、そうした意識の転換が遅れる学生が少なくありません。課題が複合化した現代社会においては、それぞれの専門分野の修得に加え幅広い教養も求められるようになりました。他方、新入生たちは学びの意義や科目選択の指針が見いだせずに、安易な履修に走る傾向もあります。その現状を踏まえ、自分らしい学業・学生生活のありかたを考える内容です。

これまでの学生IRとして報告してきたように、コロナ禍やSNSの普及に伴い学生の思考は内向きになり、社会への関心も希薄になり、より個人志向の豊かさや活躍を求める傾向が強まっています。その遠因には、慢性化した経済の低成長や、利益優先の新自由主義経済の潮流があるでしょう。加えて、近年の生成AIの急速な進化に伴い、学びの場も仕事の場も、今後劇的に変化すると言われています。AIに操られるのでなく活用できる人間であるために、教養や倫理観がますます重要になっています。しかしながら、それらを育む全学教育の意義が学生の皆さんに十分理解されているとは言えません。その現状を打開したいという意図も第１、２回授業にはあります。

第１、２回授業を制作したのは筆者です。上述の意図を十分に反映できたとは言い難いのですが、アンケート結果は次の通りです。

大学生活スタートの参考になったか

2026年度春学期の学生プロファイルで、第１回、第２回授業は参考になったかどうかを４件法で訊きました。下図は、学生プロファイルの入力時にすでに第１回授業を受講した人の回答の分布です（第２回授業の分布も類似なので省略）。なお、学生プロファイルの入力と第１～２回の受講期間は重なっていたため未受講の人もいて、第１回の受講済者（有効回答）は全体の60%、第２回は36%でした。

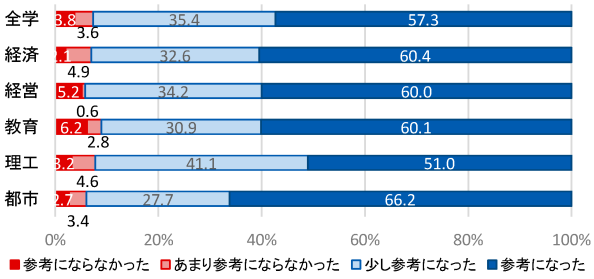


図　第１回授業は参考になったか

４件法の全学平均（参考にならなかった：１～参考になった：4）は第1回が3.46、第２回が3.47です。全学の分布をみると、６割近くが「参考になった」と回答し、「少し参考になった」を加えると第１回は92.6%、第２回は91.3%が好意的な回答です。学部別では大きな差はりませんが、都市科学部はやや満足層が多く、理工学部はやや少ないです。不満層は教育学部で若干多いです。

授業を受けて何を考えたか

前述の参考度合いの選択理由を自由記述で具体的に訊ねました。回答数は第１回が756名、第２回が400名でした。全般的に授業の設計意図に副うコメントが多く寄せられ、大学での学業・学生生活の意識付けとして概ね妥当な授業を提供できたと判断できます。

例年の学生プロファイルでは、不本意入学のため本学で

学ぶ意義を見いだせない人、第一希望で入学しても、大学合格がゴールで入学後の目標を見いだせずにやる気が起きない人が少なからず存在しています。大学生活を有意義なものにするためには、入学の早い段階で学業の意義を意識し、将来へのつながりを継続的に考える習慣をつけることが大切です。第１回授業では、大学生としてのいわば初期設定に力点を置きました。主な自由記述を抜粋すると：

- なぜ大学に行くのか根本的部分について理解が進み、どのような視点から授業に取り組むか、がわかり安心感やがんばろうという気持ちになった：済
- 大学に入学し漠然とした不安を抱いていたが、その不安の感情を「大学では自分の勉強したいことを集中的に学べ、ライフキャリアをじっくり考えていくことができる」というモチベーションに変えることができた：理
- 大学に合格することがゴールになってしまっていた私にとって、ライフキャリアの視点で考えることで大学生活を充実させようという意識を持つことができた：都
- 第一志望校でなったため、大学生活や今後の人生に後ろ向きな面もあったが、講義の中でこれからを変えるための行動をとることを重視する考え方に感銘を受けた：済

「キャリア」と言うと、学生たちはどうしても民間企業への就職活動、さらには大企業や知名度の高い企業、賃金の高い企業に入ることを連想しがちです。しかし、就きたい職業や価値観は人それぞれで、本質は職業のみならず広い視野から自分らしい生きかたを考えることがキャリアを考えることです。教育学部は教員養成課程ですので、学生が戸惑うのではとの懸念の声もありましたが、学生たちは授業設計者の意図を適切に受け止めてくれたようです：

- 自分も含め多くの同世代が自身の将来について漠然とした不安を抱えていると思うので、キャリアという面の講義はとても効果的だと感じた：理
- キャリアを「就職」や「仕事選び」といった狭い視点で考えていた。しかし、ウェルビーイングの視点から自分の生き方全体を考える重要性を学べた：教
- これまで教員免許を取ることを目標にしていましたが、大学でどんな経験をして、将来どんな教員になりたいか考えることが大切だと感じました。特に主体性は、足りていないと感じていた部分で印象に残りました：教
- 結婚や子育て、社会の変動性については考えたことがなかったので、より視野が広がり、多角的な視点から将来を考えるきっかけになった：理

第２回授業では、教養の重要性と本学における全学教育の意義を理解してもらうことに力点を置きました：

- 教養とは主体性のもとで知識を活用し、様々な場面における他眼的な考え方や価値観、さらに品格や品性に関わるものであるとわかった。大学で学ぶことの意義と、どのような姿勢で学修に臨むべきかを理解できた：都
- 専門分野の枠を超えた柔軟な思考力と、自律的な学習計画を立てる具体的な手法を獲得できた。また、現代社会に対応するリベラルアーツの重要性と、体系的な学びの設計方法を理解し、将来の課題解決力に繋がると感じた：済
- 講義を受けるだけでなく、文献を読む力や情報の信頼性を判断する力、他者の意見を尊重しながら自分の考えを表現する力が必要ではないか？と問いを持つことができました。学びは授業内だけで完結するものではなく、課外活動や人との出会い、失敗や挑戦を通して広がっていくものであると第１回と繋がることが多くあった：教

履修科目選びは、学生プロファイルの調査において、例年新入生の７割以上が不安と回答する事項です。第２回授業において、できるだけ具体的な説明に努めました：

- どういう基準で講義を選ぶか考えるときにこの講義の内容が参考になりました：営
- 自分の専門の科目だけを勉強するのではなく、自分の可能性を広げたり能力を高めるために一見関係なさそうな分野にも挑戦することが大切だと強く感じた：営
- 自分は大学で楽しもうとしか考えておらず、短絡的な考えで履修登録などをしようとしていた。自分の進路をしっかり考え、様々な教養をつけるために履修を組むという、当たり前だが見落としてしまう点を再確認できた：理
- 最初は、履修案内に従って選べばよいと考えていました。しかし実際には、どの授業にも将来につながる意味があります。履修は単にその学期だけを考えるのではなく、将来を見据えて計画する必要があると理解しました：都

参考にならなかった人の理由は

一方で、参考にならなかったという意見も若干寄せられました。それらは「高校の家庭科や保健の授業ですでに習ったこと」というコメントに集約できます。類似の意見は第１章で18名、第２章で６名でした。加えて、「履修についてはすでに知っている話」が６名、「現実には科目選択の自由度が少ないから」が５名いました。

人によって既知の内容も含まれていることは否めません。しかし「当たり前だと思っていることを言語化してくれたような授業で自身の理解が深まった」とのコメントに代表されるよう、大学生活のスタートに当たり認識を新たにすることも必要です。高校時代との内容の重複は、全学を対象にした共通科目の性質上も致し方ないことと考えます。

本調査結果の詳細は、サイボウズ・ガルーンで公開しています。
ファイル管理＞ 教育推進機構＞ 旧 高大接続・全学教育推進センター＞
学生プロファイル

機構ニュース

開催案内　2026年度　横浜4大学「ヨコハマFD・SD連絡協議会」

本学は、横浜市内にある３つの大学(神奈川大学、関東学院大学及び横浜市立大学)とFD・SD活動の連携に関する包括協定を締結し、FD・SDに関わる取り組みを進めています。その一環として、例年12月に各大学の取り組みを広く公開する「ヨコハマFDフォーラム」を開催してきましたが、2024年度より、４大学連携の原点である「連絡協議会」形式で実施しています。

本協議会は、４大学のFD・SD関係教職員を主な参加者とし、従来のフォーラム同様、学生も交えて、各大学のFD・SD活動や授業評価等に関する現状や課題を共有し、改善・解決に向けた方策の検討や、今後の連携に向けた協議を行う場とすることを目的としています。

今年度は横浜市立大学が幹事校となり、同大学の金沢八景キャンパスで開催します。

開催日時：2026年12月19日（土）14：00～17：45（予定）
開催場所：横浜市立大学 金沢八景キャンパス 本校舎・YCUスクエア
対象者　：４大学の教職員および学生
テーマ　：ジェネリックスキルの教育と評価―「学士課程教育の構築に向けて（答申）」から18年を経て―

開催趣旨：

2008年に中央教育審議会がまとめた「学士課程教育の構築に向けて（答申）」では、専門的知識・スキルや教養にとどまらず、「汎用的技能」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」を包括する「学士力」が示され、ジェネリックスキルの概念が大学教育に持ち込まれました。その後、「学士力」の枠組みは各大学のディプロマ・ポリシーや多くの授業科目の教育目標に反映されるとともに、「内部質保証」や「教学マネジメント」の観点から、ジェネリックスキルが実際に育成されているかについての測定・評価も求められるようになっています。

同答申から18年目に当たる今年、ジェネリックスキルの教育は本当に教育現場に定着しているでしょうか。個々の授業でその育成はどのように行われ、学生はその獲得や伸長を実感しているでしょうか。そして、その評価は信頼できるものとなっているでしょうか。本協議会では、４大学での取り組みの状況を共有し、その成果、課題と将来について議論します。

当日は、テーマに関する導入（『日本の大学におけるジェネリックスキル』）と各大学からの報告に続き、参加者によるグループディスカッションを行います。トピックには、「様々な授業形態でジェネリックスキルをどのように育成するか」「専門教育とジェネリックスキルの育成」「AI時代に求められるジェネリックスキルとは何か」などが予定されています。本号で報告した学生アンケートでも、生成AIが学生の学修に急速に浸透している様子が明らかになりましたが、こうした中で学生にどのような力を育むべきかは、本学にとっても重要な課題です。本協議会での他大学の事例やディスカッションでの意見を、本学の教育の改善に活かしていきたいと考えています。

本学の教職員・学生であれば、どなたでもご参加いただけます。ご関心のある方はぜひご参加ください。参加募集の詳細は、11月中に各部局を通じてご案内します。

― 教育推進機構からのお知らせ―

【2026年度秋学期授業アンケートの実施について】

第４ターム：2026年11月19日（木）～12月２日（火）
第５ターム／秋セメスター：2027年１月19日（火）～２月16日（火）
※授業アンケート実施対象科目は、ゼミ、教育実習、卒業研究関連科目を除く、履修者10名以上の科目となります。対象科目であれば、授業支援システムの講義編集画面に自動的に登録されます。万が一、対象科目であるにも拘らず講義編集画面にアンケートフォームが表示されない場合は、教育推進機構までメールにてご連絡ください（aec-fd@ynu.ac.jp）。

【学生IR、FD活動の報告書類の公開】

学生の学修・生活行動の分析結果や卒業・就職先調査結果など、各種学生IRおよびFD関連の情報は、関連する会議体や教授会でのFDセミナーにおいて報告しておりますが、よりタイムリーに関係各部局に展開すべく、サイボーズ内に公開フォルダを設け、関係各部局にて適宜参照・入手できるようにしています。必要に応じて学生サポートや教育改善にご活用ください。

■格納先:サイボーズ> ファイル管理 > 教育推進機構
■提供文書の取り扱い:学内限定公開(本学教職員のみ)を含みます。学内限定公開文書のダウンロード後の取り扱いについてはご配慮ください。

大学教育再生加速プログラム

横浜国立大学 AP/FDニュースレター 第26号（通号52号）
発行：令和８年（2026）年11月　編集・制作：教育推進機構
Email：aec-fd@ynu.ac.jp　ホームページ：https://ope.ynu.ac.jp/